

池田文書の研究(十七)

池田文書研究会

船曳清修の書簡について

一、船曳清修の略歴

清修は、洋方産科医として初の侍医。文政八年二月二日京都に生れる。父・紋吉(字子錦)は播磨の人で京都に移り漢蘭折衷の産科を開業して名声があつた。清修の初名は卓介でのち通称とした。名は修、字は徳夫。号は卓堂・長春園。水原三折に産科を学び、嘉永元年ころ緒方洪庵に入門。父が蘭方医山崎玄東より入手したブレンクの *Doctrina de morbis sexus femine*, Wien, 1808 を翻訳して嘉永三年『婦人病論』を出版した。この書は西洋産婦人科訳書の刊行物として最初のものといわれる。京都御幸町二条南に開業。

明治元年七月軍務官病院診療師兼医学所教授方となる(因みに賀川満載は同年六月に軍務官病院診療生となっている)。明治三年四月少典医に任ぜられる。明治四年八月少侍医、明治八年一月六等侍医に昇進するが、西南戦争の際の官制改革により、明治十年九月侍医を免ぜられ、医員に降格される。この間、明治四年五月静寛宮種痘御用掛、明治六年九月権典侍橋本夏子妊娠御用掛、明治七年十月権典侍柳原愛子妊娠御用掛、

明治九年五月奥羽巡行供奉、明治十年三月肥後戦地出張などをそれぞれ命ぜられる。

さらに官制改革により明治十五年十一月医員を免ぜられ、宮内省御用掛侍医心得となるが、明治十八年十二月非職、明治二十一年十二月非職満期となる。明治二十八年六月二日没、享年七十一。墓所は谷中墓地。

(参考文献・京都府医師会編『京都の医学史』、侍医寮編『転免物故履歴書』、大植四郎『明治過去帳』)

二、船曳清修の書簡

清修の書簡は七通を数える。年の特定できる書簡は一通のみであるが、内容からみて、いずれも清修が侍医局医員だった時期のものと推定される。

書簡二六〇二・二六〇八の二通は、明治十二年八月三十一日明宮(大正天皇)の出産の際、清修が柳原愛子(早蕨)権典侍妊娠御用掛として勤務したときのもので、権典侍の容体を伝える。この時期の柳原権典侍の容体については謙齋による容体書控もあるので、参考のためこれを末尾に附した。

書簡二六〇五は、東園家の患者について、清修が自分の誤診をおそれ、謙齋に診断と処方について教示を仰いだものである。本簡と書簡二六〇七から清修の蘭方産科医としての処方的一端を窺うことができる。

書簡二六〇六から、清修が妻の病気の診察を謙齋に依頼していたことが知れる。

(遠藤 正治)

池田文書——船曳清修書簡一覽

| 書簡番号 | 発信年月日()内推定 | 発信者名 | 受信者名 | 備考 |
|--------|-------------------|------|----------------|----------|
| 1 | 2602 明治(12)年7月29日 | 清修 | 池田先生 | 早蕨権典侍容体 |
| 2 | 2608 明治 年10月1日 | 清修 | 池田先生 | 早蕨殿學痛之由 |
| 3 | 2603 明治 年9月14日 | 船曳清修 | 謙齋池田先生 | 裏松家より御書簡 |
| 4 | 2605 明治 年5月23日 | 船曳清修 | 池田先生 | 東園家へ参診 |
| 5 | 2606 明治 年3月2日 | 船曳清修 | 池田先生 | 荆妻義大患 |
| 6 | 2604 明治 年11月3日 | 船曳清修 | 池田先生 | 病人昨夜死亡 |
| 7 | 2607 明治 年 月17日 | 清修 | 池田先生 | 咯血も減じ |
| 附 1632 | 明治12年8月1日 | 池田謙齋 | 「柳原愛子殿御容体書(控)」 | |

1 明治(十二)年七月二十九日

二六〇二 船曳清修 池田謙齋

拝稟、連日御苦勞奉存上、扱ハ早蕨典侍昨夜一時頃より二時
間余安眠、其後少腹少々ツ、痛有之候へとも格別堪兼候程ニ
も無之、今朝六時診察仕候処、先ツ平穩之模様、昨朝より氣
分余程快覺候との事ニ御坐候、昨夕飯稀粥一碗、十一時過大
便少々通し微痛あり、嘔氣ハ更ニ無之よし、其他容体枚挙申
上候義ハ無御坐候、右御報知まで、艸々頓首拝啓

七月廿九日午前六時廿分 清修

池田先生侍史

〔田中〕

2 明治 年十月一日

二六〇八 船曳清修 池田謙齋

謹読仕候、昨来御感冒、御困却ニ付本日御来診不為在候趣奉
拝承候、早蕨殿先ツ同容、不相更學痛之由ニ候へとも、格別
申上候程之義も差当り無之候間、仮りニ御降心可申候、先は
右奉答迄、頓首 清修

十月一日

池田先生台下

〔田中〕

3 明治 年九月十四日

二六〇三 船曳清修 池田謙齋

(前文欠)奉希度、最も私為差義ニても無之様存候間、今日中保護仕候へハ下利も歎ミ可申哉ニは候へとも、当節柄心頭ニ縣^(患)り候間何分ニも今日ハ引籠加養仕度、此段御諒察奉希上、頓首拜啓

九月十四日

船曳清修

謙齋池田先生侍史

再申、昨日は裏松家より御書翰被下拜読仕候、御高案之趣承之安心仕候、委細奉承候、余ハ拜晤候、不悉

(1) 裏松家……子爵・裏松良光か。良光は嘉永三年生、明治五年承。陸軍歩兵少佐、貴族院議員。大正四年没。(田中)

4 明治 年五月二十三日

二六〇五 船曳清修 池田謙齋

今朝ハ御眠を攪し、実ニ恐縮仕候、陳は直様東園家へ參診仕候処、今日ハ意外ニ診察も出来、咽喉頸部等まで篤と診し申候、先づ疳蝕硬結等も見え不申候、諸症此間と変候様子も無之、飲含嚙下更ニ差支も無之ニ付、十分疫咳とハ存候へとも、彼衄血等ニて満堂喧騒、於私甚た心痛、万一謬診仕候てハ不相濟義ニ付、不願御繁務御苦勞奉願候事ニ御坐候、何分ニも

宜奉願、御診断且御処方乍御面倒御示教伏て奉希上、今日之

処方ハ又候あと戻り、吐舍廿m ブロマイトカリ五氏 単煉糖二勺 水二勺 右一日之用量、散方□硝石五氏砂糖二和シ五包ニ分チ一日之用量、右等之調葉差出置申候、何卒御指揮奉願候、頓首拜頌

五月廿三日

船曳清修

池田先生坐下

(田中)

5 明治 年三月二日

二六〇六 船曳清修 池田謙齋

拜申、益御清康被為入奉賀上候、陳は荆妻義過日来大患ニ罹り心痛仕居申候ニ付、何とも御苦勞恐入候へとも御一診被成下度願上候、御多務中御都合も可有御坐候へとも、何卒御操合明朝御来診被成下間布哉、右伺迄參上仕候也

三月二日

船曳清修

池田先生閣下

(田中)

6 明治 年十一月三日

二六〇四 船曳清修 池田謙齋

拜啓、毎々御苦勞奉願候病人、昨夜十時三十分竟ニ死亡仕候、其内拜趨拜謝可仕候へとも不取敢右御報道仕候也

十一月三日

船曳清修

池田様御執事中

(田中)

7 明治 年 月十七日

二六〇七 船曳清修 池田謙斎

過日は御苦勞被成下、且御教示趣難有奉拜謝、一昨日昨日ハ
稍咯血も減し熱度も低下之模様にて、少々喜色をい、居候処
今朝又々咯血多量、実ニ危懼之至ニ御坐候、容体委細ハ看病
人より御聴取奉希、別ニ細悉不仕候、処方昨日迄前方にて、¹麦
奴ハ廿氏まで用ひ上り申候、然ルニ歇止之効も不十分ニ付、
今朝より一半コロール鉄一昼夜之量十五m相用候積ニ致し申
候、最もジキタリス吐根硝石等之水薬ハやはり持用致申候、
サルシール酸四十氏は又同様相用候積ニ致申候、何分宜御教
示奉仰候也

十七日朝

清修

池田先生床下

(1) 麦奴……麦角。ライムギ、カモジグサなどに着生する菌体
で、子宮収縮剤、止血剤とした。蘭方で麦奴と誤称した。

(田中)

附 明治十二年八月一日

一六三二 池田謙斎・柳原愛子容体書扣

権典侍柳原愛子殿御妊娠中(明治十二年八月) 中山從一位殿
(旧中山大納言即ち二位局之御生父ニシテ東宮殿下之祖父ニ当タラセラル) b之請求ニヨリ御容体書差
出し候扣

(端裏書) 柳原愛子容体書扣、八月一日中山殿え出す

柳原愛子殿御容体書

御妊娠以来御持病之御癩氣月々一二回宛御発し被相成候得
共、五月下旬までは御平常御同様にて一兩日ニして御全快ニ
相成候処、六月一日突然右御癩氣御発し之節ハ病勢劇甚ニし
て御苦惱御平常之比ニあらず、随て御快癒も日間取、漸く六
月中旬頃より御快方ニ趣き、七月初めニハ御全治ニ相成候処、
同月八日青山御産所え御引移り之途中b例之御持病御発動、
余程之御劇症にて四日間甚はだ御苦惱有之候得共、六月中御
発作之節より早く御快方ニ趣キ、其後一兩度御発作有之候得
どもいつも御輕症にて、速かに御快方ニ相成申候、昨今ハ諸
症全く御鎮静ニ御座候、前条のごとく度々御癩氣御発動有之
候へ共、全く御平常之御持病御妊娠中御募り被成候義ニ付、
是迄ハ御胎児様御成育ニハ更ニ御障害不被奉存、今後とても
最早御降誕迄四十日前後ニ御座候為、右期限中多少御持病御
発動有之候とも、差たる御事ハ被為在間敷と奉存候、右御容
体概略上申仕候也

十二年八月一日

池田謙斎

(田中)